

論 文

堀経夫と日本経済思想史研究

杉 原 四 郎

I 戦前の研究 ——『明治経済学史』を中心に——

欧米の経済学説史・経済思想史を専攻していた堀経夫がどうして日本の経済思想史の研究にも従事するようになったのかについて、堀自身『明治経済学史』(弘文堂書房、1935年)の序文で、欧米経済学史の「研究の途上において、特に幕末から明治時代にかけて欧米の経済思想がどのようにわが国に摂取されたか、という問題に興味を持つようになった。それは昭和4、5年頃、すなわち当時の東北帝国大学法文学部教授の職に在った時からである」¹⁾とのべている。

欧米の経済思想史を研究する学者にとって、イギリスの経済思想がドイツやアメリカなどの後進資本主国に導入される過程で発生する対抗や消化や歪曲などの問題に興味をひかれるのは自然であり、ドイツやアメリカよりさらにおくられて欧米の経済学を導入したアジアの日本の場合には、それが一そう複雑な過程をたどることは当然だから、イギリス古典学派の研究家たる堀がその過程に興味をよせるようになったとしても、決して不思議ではないだろう。問題はそれが1929・30(昭和4・5)年頃にはじまったということである。

この点について堀は、あるシンポジウムでつぎのように語っている。「僕の場合は……ある特定の人の影響を受けたというよりも、むしろ時代に支配されたのです。つまり昭和の初めの満州事変の時代に、日本というものをもうすこし知らなきゃならん、経済学史とか思想史とかやっとる人も、やらなきゃなら

1) 『明治経済学史』序、3ページ。堀経夫の年譜と著作目録は久保芳和編著『堀先生追慕』(雄松堂出版、1985年)におさめられている。

んという一般的な空気があったわけです。それで、文部省などもそういう研究には補助金を与えるというようなことがあったんです²⁾。この最後の点について、前掲『明治経済学史』の「序」はつぎのように書いている。「私は数年前よりこの研究を志したのであるが、資料の蒐集意の如くならず、荏苒時日を過ごした。然るに昨年日本学術振興会の設立を見、幸いにして同会より援助を受けることを得たので、爰にその研究に着手することが可能となった³⁾」。

こうして堀の場合は、1930年前後のわが国の時代思潮の影響が学界にもおよび、日本研究が促進されるところがあったことに由来することがわかった。だが堀の個人的事情として、1929年にリカードゥに関する多年の研究が『リカードゥの価値論及びその批判史』(岩波書店)となって結実し、それによって同年末経済学博士の学位をえたということも、彼をして新しい分野に眼をむけさせるにあずかって力があったと考えてよいだろう。その頃まで堀は経済学史のかたわら時に経済史関係の論文をも発表しているが、この方面の労作は「19世紀初頭の英国経済界」という論文(1933年1月)が最後⁴⁾で、以来経済史の労作のかわりに、日本経済思想史の研究成果が、堀によって欧米経済学史の労作とならんで、晩年にいたるまで、発表されてゆくのである。

新しい研究分野での最初の論文は「保護貿易論と犬養毅氏⁵⁾」で、1933年12月に公表された。犬養は明治10年代に田口卯吉が『東京経済雑誌』に拠って主張する自由貿易論に対抗し、『東海経済新報』を創刊してそれに拠って保護貿易論を展開した。それでこの論文の「はしがき」はいう、「故にこの一文は、貿易政策を繞る犬養・田口両氏の論争を取扱ふものと言っても差支ない。而して

2) 「経済学史研究の原点を顧みて——堀・住谷両会員をかこんで——」、『経済学史学会年報』第3号, 1965年, 19ページ。

3) 『明治経済学史』序, 5ページ。

4) 『外交時報』, 第56巻第2号, 1933年1月15日, 堀経夫『経済学断片』(文友堂書店, 1937年)』所収。

5) 社会経済史学会編『社会経済史論集——平沼淑郎博士古稀祝賀記念号——』, 1933年12月, 日本評論社, 『経済学断片』と『経済学の研究と教育の50年』(1973年)に収録。

この論争は、第19世紀末葉の、英国派経済学（田口氏が之を代弁する）に対する米国派経済学（犬養氏が之を代弁する）及び独逸派経済学（大島氏が之を代弁する）の対抗の、我国に於ける縮図と、看做され得べきである⁶⁾と。

この場合論文のタイトルが示すように、主題は田口にでなく犬養におかれていた。それは堀が「従来田口氏程には経済学者として記憶されてゐない犬養氏が、この論争に於て自由主義の大立物田口氏に対して如何なる太刀打をしたかに、大なる関心を有ったからである」⁷⁾。田口については大内兵衛や榎田民蔵らの努力で『鼎軒田口卯吉全集』が出版され（1927—29年）、その業績を全体としてとらえるための資料的整備もととのっており、堀もこの論文で田口の全集を活用しているが、犬養については政友会総裁としては有名とはいえ、若き日の経済学徒としての活躍はほとんど忘れられており、『東海経済新報』の存在も知られることがほとんどなかった⁸⁾。堀のこの一文は、犬養の田口批判を原資料にもとづいて紹介することを主眼としたものである。そして堀は、田口の「個人主義及び政府非干渉論」に対する犬養の「全体主義及び政府職務論」の方を高く評価して、つぎのようにのべているが、このことはさきに紹介したシンポジウムにおける堀の発言が思い合わされて興味深い。

「犬養氏の『新報』第1号における『何謂保護』と題する論説は、かくて、『吾輩は我作業を保護し我資本を蓄積し以て世界万国の市場に莅み以て拮据競争するの時を待つ也』（同上、6頁）といふ句を以て結ばれてあるが、明治32年以後我国が実際に保護主義を採用し、終に今日『世界市場に莅み以て拮据競争するの時』を実現し得たることを想ふとき、氏の立論の堅実性或は即現実性を賞讃せざるを得ないのである」⁹⁾。

1935年に公刊された『明治経済学史』は、「自由主義・保護主義を中心とし

6) 『経済学の研究と教育の50年』、373ページ。

7) 同上、389ページ。

8) 『東海経済新報』が日本経済評論社から全巻複製されるのは1982—83年のことである。

9) 『経済学の研究と教育の50年』、381ページ。

て」という副題がついているように、幕末から明治30年頃までの関係文献を整理・分類した解題つき文献目録(annotated bibliography)という性格の強い著作である。当時すでに吉野作造を中心として『明治文化全集』(全24巻, 1927—30年)が刊行されており、その中の経済篇(第9巻)には明治初期の経済書(たとえば神田孝平の『経済小学』や加藤弘蔵の『交易問答』など)が復刻されていたし、福沢諭吉や田口卯吉や乗竹孝太郎の全集はすでにでていたものの、明治初期の経済書全体についての資料調査は不十分にしかなされていなかった。堀は自分が日本経済思想史という新しい分野の研究をはじめるとあっても、まず原資料の蒐集と確認という原典主義——それは彼の欧米たと日本たとを問わず経済学史の研究全体を貫流する基本的態度だった——を実行し、単行本のみならず雑誌¹⁰⁾をふくむ資料がためを本書でおこなったわけである。

II 戦前の研究 ——『日本経済学史』を中心に——

1935(昭和10)年以降も堀の明治経済学史の研究はつづけられた。1945(昭和20)年までの10年間に於けるこの方面の主な業績として、つぎの二つをあげることができよう。

まず第一に、中山伊知郎・東畑精一共編による『新経済学全集』の中の「日本経済学史」(1941年)の執筆である¹¹⁾。そこでは、明治初年から20年頃までの文献について、(1)商工立国主義が神田孝平、福沢諭吉、加藤弘之の三人の著作でどのように論じられているか、(2)奢侈の問題が以上の三人と室田充美、永峰秀樹、松岡彦二、井上毅らによってどのように論じられたか、(3)当時の著訳書の中で経済原論乃至一般経済理論に関するどんな文献があるか¹²⁾、が紹介さ

10) 『東京経済雑誌』と『東海経済新報』の他『明六雑誌』をも利用されている。

11) 『日本経済学史』(1), (2), 『新経済学全集』第六巻, 第16回, 第17回配本, 1941年7月, 10月, 日本評論社, これは『新修明治経済学史』上(高島屋出版部, 1948年)に増補して収録。

12) このうちの第二章「明治初期の経済原論」は維新直前から明治20年頃までに出た(遺稿数点をふくむ)経済理論に関する著書と訳書を, 訳書は米・英・仏の三国に分類して

れている。これ以外に『日本経済学史』には特殊経済論の一つとして「マルサス人口論の導入」がとりあげられ、そこで明治9～10年になされた元野助六郎、大島貞益、永田健助による『人口論』およびマルサス批判の潮流の紹介が、くわしく検討され、その中でボナー、堀経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』や吉田秀夫『マルサス批判の発展』が利用されている。こうした欧米経済学の導入過程の資料的研究は堀経夫の最も力を入れたところで、この『人口論』についての論稿はその代表的な例である。この種のものとして、堀は戦後つぎのような研究を発表している。「明治初期の経済文献に現われたアダム・スミス」（アダム・スミスの会編『本邦アダム・スミス文献——目録および解題——』東大出版会、1955年所収）；「明治初期の思想に及ぼしたJ. S. ミルの影響」『経済学論究』第10巻第4号、1957年1月、堀編『ミル研究』未来社、1960年所収）。

ところで当時堀が発表した諸論文の中でつぎのような一連の奢侈論が発表されていた。「ヒュームの奢侈論」（『経済学雑誌』、1940年5月）、「奢侈について—消費上の倫理—」（『理想』、1940年10月）「明治初期の奢侈経済論」（『経済学雑誌』1941年6月）。『日本経済学史』の(2)はこのような問題の線上に書かれたのであった¹³⁾。

第二に『経済学雑誌』（昭和18年10月）に寄稿された「西周の経済学」が注目される。西周については、『明治経済学史』においても、その第2章「自由主義

解説を付した文献目録。この時期の経済学邦訳書については本庄栄治郎の目録がある（本庄『日本経済思想史概説』、日本評論社、1946年）が、堀のものは、理論に限定するとともに、邦人の著書をも加えたもので、本庄の目録を相補うものといえよう。

- 13) 溝川喜一はこの「日本経済学史」が新経済学全集に組み入れられたことについて、それは「日本経済思想史が経済学史のなかで一定の市民権を得たといつてよいであろう」とのべている（『日本の経済学』、経済学史学会編、東洋経済新報社、1984年、303ページ）が、『経済学全集』（改造社、1928—1934年、全63巻）には日本経済学史はないが、『社会経済体系』（日本評論社、1926—1928年、全20巻）でもすでに、経済学前史、正統派経済学、壟断学派、歴史派、リカード派社会主義等とともに滝本誠一の執筆になる日本経済学史が、本庄栄治郎の日本経済史とならんで独立項目として登場していた。

経済論」の第2節で、津田真道とあわせて論じられていたのだが、その頃大久保利謙氏の手で『西周全集』¹⁴⁾の刊行が企てられ、堀は経済学に関する西の遺稿の整理について助力を求められた。それで堀は西周がオランダ留学から帰国後私塾育英会で講義した「百学連環」の中の経済学に関する部分について、西自身の講義ノート（いわゆる「百学連環覚書」）や聴講生永見裕による筆記本（いわゆる「永見本」）を読んで、その校証的介绍をおこなったのが前掲の論文である。明治初期の学者について堀がとくに西周に興味をよせ、晩年にいたるまで関心を持ちつづけているが、その由来はここにある。

1930年代に抬頭してきたわが国の学界における日本研究は、1940年代に入ると一層さかんとなったが、その中には国家主義的・全体主義的な思想傾向のものが見られ、経済学の領域においても、西欧経済学に対して日本経済学を樹立すべきだというような主張が声高に論じられるようになった。戦時中における堀の日本経済学史の研究は、時局的な問題意識はその底流にあったと思われるが、新経済学全集への寄稿の内容に見られるように、イデオロギー的な色彩はなく、あくまでも文献考証的な裏づけをもつ、学史研究の大道を守るものであった。

ここであまり知られていない事実を紹介しておきたい。それは1943年頃に、高橋誠一郎の監修にかかる「日本の経済学者（人と学説）」という叢書が実業の日本社で企画され、全16巻の中の一巻に予定された「田島錦治」を堀が執筆することになっていた、ということである¹⁵⁾。この叢書は高橋の『福沢諭吉』（1944年）と西田長寿の『大島貞益』（1945年）との二冊がでただけで中絶してし

14) 『西周全集』は一巻が出た（1945年、日本評論社）だけで中断し、戦後、宗高書房から全3巻として出た（1960—62年）。

15) 高橋『福沢諭吉』と西田『大島貞益』の巻末に全16巻のテーマ・担当者のリストがのっているが、その中に堀経夫『田島錦治』がある。野村兼太郎『田口卯吉』、大河内一男『金井延』、中山伊知郎『福田徳三』、飯島幡司『戸田海市・津村秀松』らものっている。なお1935—45年ごろの日本経済思想史の研究状況については杉原「昭和10年代の経済学史研究」（中央大学『商学論叢』第28巻第5・6合併号、杉原『日本の経済学史』、関西大学出版部、1992年に所収）参照。

まい、堀による田島錦治論も結局流産してしまった。田島錦治(1867—1934)は東大出身で若き日に書いた『最近経済論』(有斐閣, 1897年)は、主観価値説の立場に立つ新しい経済原論の書として注目をあつめ¹⁶⁾、彼は新設の京都大学における経済原論担当者として法科大学の中心人物の一人となった。京大教授時代も『経済ト道德』(有斐閣, 1920年), 『労資ト利潤』(1922年, 有斐閣), 『経済原論』(有斐閣, 1925年), 『東洋経済学史——支那上古の経済思想——』(有斐閣, 1935年)などをあらわし、1919年経済学部が発足してから河上が1928年に定年退職するまでは、河上と毎年交代で原論と学史を講義していた。堀は二人の講義をきき、その指導もうけていた。¹⁷⁾堀は『経済論叢』(京大)の田島博士還暦祝賀記念論文集(第25巻, 第4号, 1927年10月)に「労働価値説の通俗化——特にリカードとマカロクに就て——」を寄せている。田島の経済学についての研究は今もないので、堀の田島論が流産したのは惜しい(田島の年譜と業績目録は『東洋経済学史』の巻末にある)。

戦後になって、堀の日本経済学史研究はさらに進展する。1948(昭和23)年に、戦時中の業績(『日本経済学史』)が『新修明治経済学史』(上)にまとめられ(高島屋出版部), 1975(昭和50)年に、日本経済思想史の分野における堀の研究成果を総括した『明治経済思想史』(明治文献)が出版された。それは『明治経済学史』と『新修明治経済学史』(上)とを中心に増補修正したものである。

ところで、その『明治経済思想史』の「跋」の最後に、「旧著に増訂を加えることを可能ならしめたのは、昭和41年度から同44年度にかけての、文部省の科学研究費による特定研究『明治・大正・昭和における日本近代化の研究』に参加したことに基づく」¹⁸⁾と書かれている。そこで、つぎにこの特定研究のこ

16) 『明治経済学史』の第1章資料の中で、堀は1897(明治30)年に出した田島錦治の3冊の著訳書(『最近経済論』の他, 『日本現時之社会問題』と『経済政策』)を紹介している。

17) 堀は田島の経済原論は「どちらかと言うとジード的」で、その経済学史も「ジード・リスト的」だったとのべている。前掲『経済学史学会年報』第3号, 29ページ。なお田中敏弘氏によると、関西学院大学図書館には堀経夫の筆記した田島の経済学史の講義ノートが所蔵されている由である。

18) 『明治経済思想史』, 増訂版, 514ページ。

とについてのべることにしよう。

III 堀経夫と「特定研究」（1966—1969年）

文部省の科学研究費の中に、大規模な学際的共同研究を促進するために「特定研究」という項目があらたに設けられたが、自然科学ではこの項目にふさわしい課題が容易にみつかるのに、人文・社会科学ではなかなかみつからず、やっと1966年に「明治・大正・昭和における日本近代化の研究」というテーマに特定研究があたえられることになった。これには、人文・社会科学の多くの学会が参加したが、経済学史学会でもチームを組んで「社会経済思想の発展より見た日本の近代化」というテーマでこの特定研究に参加した。この研究班の代表は堀経夫で、チームのメンバー20数名の多数は経済学史学会の会員であった。

この研究に1966年から1969年の4年間特定研究費が交付され、その間およびその後いろいろなかたちでメンバーによって研究成果が公表されたが、そのうちで最もまとまったものとして、杉原四郎編『近代日本の経済思想——古典派経済学の導入過程を中心として——』（ミネルヴァ書房、1971年）がある。堀経夫は本書につぎのような序文を書き、この共同研究の意図と内容についてのべている。

なお、本書の目次はつぎの通りである。

古典経済学と近代日本

古典経済学と近代日本 ——わが国への古典派導入前史を中心として——

杉原 四郎

明治初期の経済思想

福沢諭吉の経済思想

杉山 忠平

田口卯吉の経済思想 ——経済と歴史——

溝川 喜一

古典経済学の導入過程

アダム・スミス ——ひとつの序章——

山崎 怜

リカードウ

真実 一男

J. S. ミル ——明治期についての試論——

永井 義雄

あとがき

杉原 四郎

『近代日本の経済思想』によせて

文部省の科学研究費による特定研究「明治・大正・昭和における日本近代化の研究」は、昭和41年度から44年度にかけて4年間、全国的なもの（Ⅰ）と機関ごとのもの（Ⅱ）合計23班によって、それぞれ特殊なテーマのもとに実施された。その成果には、著書や論文や口頭による研究報告の形をとったもの、また内容として総合研究的なものや個別研究的なものがあるが、いずれも過去1世紀間におけるわが国近代化の過程を知る上に不可欠なものばかりである。なお今後も、その成果が引き続き発表されるものと期待される。

さて、わが班は「社会経済思想の発展より見た日本の近代化」を共通のテーマとし、全国的な規模で22名ないし23名——4年間に1、2名の異動があった——の研究分担者が、それぞれの分担課題について研究を実施した。分担者の大部分は経済学史学会の会員であるが、各人の研究に連係をもたせるために、その課題の性質に応じて、全員を6名ないし8名よりなる3つの大きなグループに分けた。経済思想班、社会思想班、および比較思想班がそれであって¹⁹⁾、各班は年に数回研究発表会を催して連係の目的を果たし、それがまた全員の出席する研究発表会につながった。

全員の研究を共通のテーマにつながらせるために以上の方法を採用したのであるが、しかしその成果の発表はさまざまな形をとったのであって、それは前に述べたこの特定研究全体のばあいと同様である。今それらを具体的に挙げる必要はないが、今後も続々現われるであろう。そして本書も正にその一つであ

19) 経済思想班のメンバーは、堀経夫、真実一男、山崎怜、後藤靖、杉原四郎、田中真晴、溝川喜一、杉山忠平、社会思想班は、水田洋、定平元四郎、川口武彦、永井義雄、大前朔郎、坂本武人、市原亮平、伊原吉之助、比較思想班は大塚久雄、内田義彦、林道義、内田芳明、関口尚志、林竹二であった。

って、総合研究的なものに属するのである。

『近代日本の経済思想』という表題は、いささか広すぎるくらいがあるけれども、少なくとも明治・大正期における古典派経済学の導入、消化、および定着の過程について、これほど詳細な研究は未だかつてなかったし、またこれほどまとまりを見せたものは先例がないと信ずる。むろん、これで完璧だというわけではないが、しかし、例えば本書の第3部をなす「古典派経済学の導入過程」のなかにマルサスが挙げられていないことにたいしては、彼の経済学は古典派経済学において多少異なる地位を占めるものであり、彼をこの学派の重要な一員たらしめたものは人口論であったのであり、また彼の経済理論は本書の取り扱った時期には事実導入されていなかったことなどを考え合わせれば、マルサスが漏れていることはむしろ当然である、というべきであろう。因みに、マルサス人口論の導入については、社会思想班の一員（市原亮平教授）による綿密な研究が別の形で発表されているし、また今後とも発表されるであろう。

なお、第3部で取り扱われた主要な学者以外の、いわゆる亜流に属する諸学者の経済学ないし経済思想の導入や影響については、第1部の「古典派経済学と近代日本」および第2部の「明治初期の経済思想」のなかで、相当に広く言及されていることを、注意しておきたい。

最後に、本書の執筆者諸兄は、先きに述べた経済思想班に属するメンバーを主体とするが、その他に社会思想班に属するメンバーも加わっている²⁰⁾ことを、申し添える次第である。

1970年11月28日

堀 経夫

堀は、自分の研究テーマ「西洋経済学の輸入と日本の近代化」に関する1969年度の研究実績報告をつぎのように書いている。「今年度は、明治前期におけ

20) 社会思想班に属している永井義雄を指す。

る西洋経済学の輸入について総まとめを一応終わり、これに関する著書を執筆、近く出版の予定である。それに関連して特に重点をおいて研究を加えたのは、幕末から明治4年にかけての、西周による西洋経済学の導入についてであるが、この導入の特徴は、著書または翻訳書によったのではなく、私塾における連結講義（『反学連環』講義）の中でなされたものによった点である。日本学士院例会（昭和44年12月12日）および特定研究研究報告会（昭和45年3月27日）において、これに関する研究発表を行った²¹⁾。ここに予告されている著書は、『明治経済思想史』（明治文献、1975年）をさすものと思われる。なお、堀は晩年、西周についてつぎのような論文を発表した。「西周と津田真道による西洋社会科学の導入について」（大道安次郎博士退職記念論文集『経済と社会』、ミネルヴァ書房、1972年；堀経夫博士喜寿記念事業委員会編『経済学の研究と教育の五十年』、世界保険通信社、1973年に収録）。

特定研究「明治・大正・昭和における日本近代化の研究」はこの研究全体の連絡組織をもうけ、東京大学の社会科学研究所がその事務局となり、この特定研究に参加する21～24の研究組織の連絡にあたった。そして、4年間に数回合同研究会をひらいたが、1968年度に開かれた2回の合同研究会のうち、秋季の研究会には、私がわれわれグループを代表して「経済学の導入過程における諸問題」という報告を行った²²⁾。また、この特定研究全体の総括として高橋幸八郎編『日本近代化の研究』上下が1972年に東京大学出版会から出版されたが、この論文集には、われわれのグループから坂本武人「社会政策学会の成立と発展——第一回大会までの経緯——」が収録されている²³⁾。

堀経夫は大学紛争の嵐が全国的に吹きあれた時期に4年間つづいたこの共同研究を全体的に統括する代表者として、また個人的には「西洋経済学の輸入と

21) 昭和44年度特定研究（Ⅰ）実績報告

22) 『特定研究「明治・大正・昭和における日本近代化の研究」（合同研究会報告要旨昭和43年度）』、特定研究「日本近代化」研究連絡組織、1969年3月、17—18ページ。

23) 『日本近代化の研究』、上巻に所収。

日本の近代化」というテーマで経済思想史の研究に参加、1970年3月27日の最後の研究会で「西周による西洋経済学の導入」という報告をおこなった。この共同研究は、堀が晩年まで研究を継続した日本経済思想史への関心を彼自身もちつつける支えになったと同時に、その後経済学史学会や社会経済史学会などを中心に漸次高まってきたわが国の学会における日本経済思想史研究への関心を培養する力となった。

IV 日本経済思想史研究史上の堀経夫

日本経済思想史の研究は、明治の後半期に、瀧本誠一、福田徳三、河上肇らによって始められ、大正期に、高橋誠一郎、野村兼太郎、本庄栄治郎、土屋喬雄らによってうけつがれ、昭和に入って、住谷悦治、加田哲二、堀経夫²⁴⁾らによって発展させられていった。こうした諸家のうち、堀経夫による日本経済思想史研究の特色は、対象とする時期を幕末から明治20年代（1860年代から1880年代）頃までに限定し、その時期に、欧米から種々の経済学がほぼ同時にわが国に導入され、単なる直接的紹介から徐々に消化吸收されてわが国の現実と結びついて成長しはじめてゆく過程を、理論経済学と経済政策論（とくに商工立国主義と貿易政策、なお奢侈論は理論政策両面にわたる）を中心に、原資料の正確忠実な紹介を基礎に究明したところにある。堀と同時代の住谷や加田とのちがいは、二人の場合明治の中期以降も視野に入れられ、したがって社会主義思想も考慮の対象となっているのに対し、堀の場合には時期の限定から社会主義は視野の外におかれ、思想的には自由主義と国民主義の二つが問題とされ、全体の基調としては国民主義の経済思想の紹介により重点がおかれているといえるであろう。それは堀の場合、幕末・明治期にわが国に導入された外国の経済学のうち、英

24) 堀はこれらの人々のうち、本庄と住谷とについて、つぎの文章を書いている。「書評・本庄栄治郎博士著『日本経済思想史概説』」、『京都帝国大学新聞』1940年6月5日号、「故本庄栄治郎会員追悼の辞」、『日本学士院紀要』第32巻第1号、1974年3月；「書評・住谷悦治『日本経済学史』」、『図書新聞』第34号、1958年1月25日。

仏経済思想のみならず独米の経済思想（とくにリストやケアリー）の紹介にも力が入れられていることにもあらわれている。

田中敏弘によれば、『明治経済学史』（1935年）の反響は大きく、多くの新聞や雑誌に書評があらわれ、本書が一方で欧米経済学史研究の基礎の上に立つとともに、他方で明治初期のわが国の原資料の蒐集と考証をふまえたものである点が諸家によって高く評価された²⁵⁾。こうした反響をよびおこした本書の出現は、昭和10年代における日本経済思想史研究の隆盛をもたらす契機となった。

堀の没後10年にして出た『明治経済思想史』増訂版（1991年）においても、『明治経済学史』の上記の基本性格は維持されている。『明治経済思想史』（1975年）以後1981年までに増訂された箇所は増訂版の515～518ページにかかげられているが、みられるように、最近の関連文献が随所に追加されてはいるものの、すべて旧著でとりあげられていた幕末から明治20年代の文献に関連するものに限られている。1935年以降も、堀はこの時期以前にも以後にも研究範囲をひろげずに、近代日本の黎明期の経済思想史的究明をよりふかくほりさげることに専念したのである。

1987年11月に千葉大学で開かれた経済学史学会第42回全国大会は、学史学会としてははじめて、共通論題を日本経済思想史とし、二日目の午後に「近代日本の経済思想」に関する3人の報告を中心としたプログラムを組んだ。『経済学史学会年報』第6号（1968年）の学界展望「日本経済思想史」を執筆した真実一男がそこで指摘している「変則的」情況——欧米の経済学史の研究が世界的水準に達している日本の経済学史学会で、日本経済思想史の研究史は逆に精彩を欠き、スミスの専門家は多いが「日本のスミス田口卯吉」の専門家には事欠く情況をいう²⁶⁾——が、その後徐々に変化を見せはじめ、学会全体としてこ

25) 田中敏弘「堀経夫博士と日本経済学史研究」（『明治経済思想史』増訂版、日本経済評論社、1991年、525—527ページ、田中『堀経夫博士とその経済学史研究』、玄文社、1991年、105—108ページ）参照。

26) 『経済学史学会年報』第6号、1968年、16ページ。

うしたテーマを共通論題にとりあげることがようやく可能となったのである。

杉山忠平「福沢諭吉における経済的自由——とくにその初期について——」，上野格「柴四朗の保護貿易主義とナショナリズム」，*飯田鼎「戦前日本社会政策学会の成立と衰亡」の三報告が，河野健二，多田顕，羽鳥卓也の司会のもとに行われ，それぞれの報告に長幸男，杉原四郎，眞実一男がコメントをしたあと，一般討論がなされた。これらの報告やコメントの内容については別稿にゆづり²⁷⁾，ここではつぎの二つのことをしるしておきたい。

(1) この報告やコメントに参加した杉山と杉原と眞実とは，前掲の『近代日本の経済思想』の執筆者であり，とくにそれに福沢論を書いた杉山にとっては，その論文がその後の彼の福沢研究の出発点をなした。眞実が『経済学史学会年報』に日本経済思想史の学界展望をかいたことは前述の通りであるし，杉原は特定研究に参加したときの自分のテーマであった「明治時代の経済雑誌」について経済学史学会第34回大会（1970年）で報告した²⁸⁾。また「日本文学にあらわれた社会思想の変遷」というテーマ特定研究に参加していた内田義彦²⁹⁾は1967年に『日本資本主義の思想像』（岩波書店）を出し，長幸男と住谷一彦の共編になる『近代日本経済思想史』（二巻，有斐閣）が1969年と1971年に出たが，この執筆陣には特定研究のメンバーであった内田芳明や関口尚志や眞実一男や杉原が加わっている。そして特定研究のリーダーであった堀経夫の『明治経済思

27) 杉原「日本経済思想史研究の現状」，『経済評論』1979年1月，『近代日本経済思想文献抄』（日本経済評論社，1980年）所収。

28) 私は「明治時代の経済雑誌序説」（関西大学『経済論集』第16巻4・5合併号，1966年3月）をかき，『西欧経済学と近代日本』（未来社，1972年）に収録した。

29) 内田はこのテーマについての1969年度の研究内容について，つぎのように報告していた。「日本の思想において非近代的といわれるもののなかにじつは近代の内発的思考があったのではないかということを中心に考えてきた。第一は，漱石を中心に，漱石における経済的なものを漱石の弟子における経済的なものの違いを確認する作業。この内“漱石の作品の登場人物における経済的なもの”については近く発表の予定である。第2は，故三枝博音博士の三浦梅園の研究を再検する事で，三浦梅園それ自体の研究をまっとう発表したいと考えている」。だが晩年の大患のために，内田は梅園研究を中絶せざるをえなかった。

想史』が出るのが1975年である。日本経済思想史に関するこれらの著書の出現が経済学史学会におけるこのテーマへの関心をもちあげてゆくのに貢献するところがあったとすれば、学史学会のメンバーを中心とする四年間の特定研究が、学史学会の全国大会最初のこの共通論題を生み出す契機の一つになったと見ることもできよう。

(2) 上野格の報告は、東海散士の筆名で明治初期の政治小説を発表したことで有名な柴四朗が、H. C. ケアリーの蔵書のあるフィラデルフィア大学でケアリーの直弟子から保護主義の経済学を学んで帰り、谷干城や大島貞益らと協力して雑誌『国家経済会報告』などにより保護主義の経済思想家として活動したことを、彼の郷里会津若松の市立図書館におさめられている蔵書³⁰⁾などを資料に紹介したものである。こうした経歴からみて、柴四朗は、まさに、ケアリーの著書を『圭氏経済論』（全四巻、1884～88年）として紹介し、『東海経済新報』によって田口卯吉と論争した犬養毅の活動をうけついで人物といえるであろう。

さきにのべたように、堀経夫は1933年に「保護貿易論と犬養毅氏」を発表し、政治家として有名な犬養が、青年時代にはケアリーによって保護貿易論を主張した論客であったことを紹介することから、日本経済思想史の領域での活動をはじめたのだった。それから約半世紀たった1978年にひらかれたこの学会は、明治の保護貿易論の研究についても、堀の先駆的開拓を一步前進させるところがあったことをしめしていたのである³¹⁾。

30) 上野格「東海散士（柴四朗）の蔵書——明治初期経済学導入史の一齣」（成城大学『経済研究』第55・56合併号、1976年12月）参照。なお柴四朗はアメリカ留学中「日本租税論」という学位論文を書いたが、そのことはつぎの著書の中で紹介されている。戒田郁夫『西欧経済学と明治財政』関西大学出版部、1988年、361—374ページ。

31) 本稿は、1982年9月18日経済学史研究会の堀先生逝去一周年記念集会で発表した「堀経夫先生と日本経済学史研究」の草稿を増補したものである。文献確認のうえで、井上琢智氏の教示をえた。